

柵の木からの手紙

2023年 卯月 4月号



5日： 清明

6日： 満月 : 旧 閏2月 16日

20日： 穀雨 : 新月 旧 3月 1日

越冬エン麦の雪融け後の様子

左上写真は、昨年10月26日の初霜時の様子。
左中写真（3月末）の看板の左は夏に小麦を収穫してエン麦を栽培して9月末に畑にすき込み、土が露出。

右側は、9月上旬に芋を収穫して中旬に赤ビーツ以外の有機圃場全面積にエン麦を栽培、枯れたエン麦が畑を覆っている。僅かですが、糸状菌も付いています。

左下写真（3月末）の中央から左は、越冬エン麦。右は、赤ビーツを栽培していた為、9月中旬にエン麦を播種できなかった部分。畑が乾いたら、越冬エン麦を畑にすき込みます。

この栽培方法は、土中の微生物の多様性を回復して土の生命力を回復して行く方法。今問題のカーボンオフセットにも係る取組です。土中に炭素を取り込んで行く方法。 緑肥の種類を混ぜて播種して栽培すると微生物の多様性に、より効果があるようですが、今はこの方法で試験実施中です。

今年は、この方法を一般の圃場に取り入れてみたいと考えています。作物が無くて9月中旬頃に播種できる部分として小麦の収穫跡を予定しています。でも、ここは普通でも小麦収穫後にはエン麦を播種して9月末に畑にすき込んでいる訳で、価値があるかどうかはわかりません。

導入方法としては、小麦収穫後に麦稈ロールを運び出した後に、チョッパーを掛けて小麦の殻残

渣を粉碎する。その後、堆肥を散布。9月中旬にエン麦を播種。浅くロータリーを掛けてエン麦の種を土の中に混ぜて行く。雪前に成長したエン麦に粒状脱脂米糠を散布してそのまま雪に埋もれて行く。例年道理の当たり前の作業を続けて行くことも大切ですが、ちょっと目先を変えて試験をしながら進んで行く事も楽しいですね。

賛助会員企業紹介

オホーツク高橋農場



高橋 祐司 氏

33歳の時、食の重要性に気づき、群馬県から北海道へ移住。訓子府での酪農研修を経て、見えない糸に曳かれ、畑作農家の義父母が手掛けたMOA自然農法を引継ぎ、いつの間にか30年が経ちました。



「鮮やかな赤色」にひとめぼれ

畑作3品(ビート、馬鈴薯、小麦)を主に栽培しています。経営面積の1割程で有機JASを取得し、義父母の時代から60年程自然農法を続けてきました。4年前から赤ピーツの「鮮やかな赤色」に心惹かれ自然農法で栽培を始め、健康成分が豊富なピーツを手軽に食卓へ並ぶようにしたいと思い、加工品を開発しました。

住 所：美幌町田中21番地
T E L：美幌自衛隊北門となり
営業拠点：0152-73-0534

オススメ

赤ピーツの健康を感じてもらうため、地域企業・大学の協力の下、家庭で手軽に食べられる「び美っとピーツ」シリーズを商品化しました。



「び美っとピーツ」シリーズ
いれて紅・たべて紅・美一酢

■購入場所：コープさっぽろ美幌・網走・北見、Parabo、ポッポ屋、道の駅ほのか

上記記事は公益財団法人オホーツク財団（北海道立オホーツク圏地域食品加工技術センター）の「食加技だより 令和4年度No. 2」で紹介されたもの。

赤ピーツの出荷の状況

昨年は、128穴セルトレー160枚に赤ピーツの種を播き有機圃場に移植して全量有機栽培。

8月からコープのご近所野菜に有機赤ピーツとして出し、10月からは「ふるさと21」で有機赤ピーツのネット販売が始まりました。

(2023年 3月31日現在)

収穫量	6485kg	
出荷量	COOP札幌	407kg 6.3%
	ほのか	94kg 1.4%
	パラポ	76kg 1.1%
	ぽっぽ屋	49kg 0.7%
	ふるさと21	328kg 5.1%
	一般	45.4kg 0.7%
	加工向け	373.1kg 5.8%
廃棄量	4428kg 68.3%	
残量	684.5kg 10.6%	
合計	100%	

農産物赤ピーツの廃棄量の多さが大問題です。